

文章題テスト・小説(4)

月 日
名 前

★ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

夏の太陽が、いくらか西にかたむきかけていた。

ハカセたちは、舟坂山の頂上にいた。

「ハカセちゃん、ここまで来ても、いないってことは、ハチベエちゃんはこっちには来なかったんじゃないのかなあ。」

木の下に足を投げ出したモーちゃんが、太った体ではあはあ息をつきながらハカセに言った。ハカセもめがねをはずして顔の汗をぬぐっている。

「そうだねえ。ハチベエくん、いったいどこに行っちゃったのかな。」

「もしかしたら、今ごろ貝塚のところにもどってるかもしれないなあ。」

「そんならいいけど、ひよっとしたら……。」

「ひよっとしたら……?」

ハカセはめがねをかけなおすと、両手を口に当てて、大声でどなる。

「ハチベークーン。」

ハカセのかん高い声が、山々にこだました。辺りは静かだった。

「モーちゃん、城跡にもどろう。」

ハカセが、モーちゃんをふりかえった。

「それで、もしハチベエくんがもどっていなかったら、そうなんは決定的だな。」

ハカセのきん張した顔つきを見たたん、モーちゃんも急に体をひきしめて立ち上がった。

同じころ、ハチベエは、まだ暗い洞窟の中にいた。

暗やみというものが、こんなにこわいものだとは、ハチベエは知らなかった。

いま、自分がどこにいるのか。いったいどれくらいの距離を歩いたのか。そればかりか、時間の感覚さえ失ってしまった。

ひよっとしたら、もう真夜中になっているのじゃないだろうか。



ハチベエは、のろのろ歩き続けながら、そんなことを考えていた。

もう、何度も足をとられてころんだ。そのたびに手や足のどこかをすりむいた。しかし痛いとは思わなかった。痛いかわりに、くたくたにつかれていた。足も体も、棒ぼうのように固かたくなって、関節がみしみし音をたてそうな気がする。

でも、休む気にはなれなかった。ちよつとでも立ち止まったが最後、体がしびれて動かなくなるような、そんな不安が、ハチベエを歩かせているのだ。

ふと、ハチベエは手に触れる壁の手ざわりがちがうのに気づいた。さっきまでの湿しめったやわらかい土の感かん触しよくから、固かたくてざらざらした手ざわりに変かわっている。そういえば足元の地面も、さっきまでとまるでちがう。コンクリートのような、しっかりした床ゆかにかわっているのだ。

ふいにてのひらが壁の角に触れた。どうやらトンネルが、右に曲がっているらしい。こんなことは、今まで一度もなかった。ハチベエは用心深く壁にそって足をすすめる。

と、はるか目の先に光の線が何本も見えた。ハチベエは目をこすった。

まちがいなく、それは白い光のすじだった。光のすじのある辺り、薄うすぼんやりと洞窟の内部が見える。

「出口だ！」

ハチベエは、思わず壁から手を放すと最後の力をふりしぼって光のすじめがけて走った。

(那須正幹「それいけズッコケ三人組」より)

1 この文章を、大きく二つの場面に分けるとき、二つめの場面はどこから始まりますか。二つめの場面の初めの五字を書きぬきなさい。「」や「」も一字とします。

--	--	--	--



